釣れ釣れなるままに

２００１年思い出の釣行記 PART.　６

根源的な野生への復活

鹿島釣狂

釣遊会第７回大会			
☆開 催 日	平成１３年１１月１１日		
☆開催場所	宇勢内～鳧舞		
☆入釣場所	三石川河口		
☆潮	満潮	２２：２２	１０９㎝
	干潮	０５：３８	５１㎝
☆釣　　果	カジカ	３６６ ㎜	１
	ハゴトコ	２２０ ㎜	４
	重量	１５０ ０ｇ	
☆成　　績	合計点数	７１６ 点	
	成績	１６ 位	
	持ち点	１６ 点	
	累計点	４５ 点（①17⑧③16）	
	年間	１１ 位	

大会 1 週間前の日曜日、小春日和と言っては遅い初冬ではあるが、抜けるような快晴で

気温も上がり腰が落ち着かない。「温泉にでも行くか」と女房をドライブに誘う。行き先は何処でもよいことを告げたが、女房が

「来週の釣りの大会は何処であるのですか？　向かう先はそっち方面でいいのよ」

と私の心を見透かしたように殊勝なことを言う。長年連れ添った女房の心遣いを思い、ドライブ先はもちろん大会範囲の海岸線に決定した。

夏の終わりに一緒にドライブした有勢内浜、東静内漁港左、春立４区、三石漁港左をもう一度丹念に見て回った。

春立４区前の浜には私の十八番の磯がなくなっている。海岸線全てに護岸工事が施され、その所々にコンクリートで固めた舟揚場が完成している。満潮時はともかくとして、干潮時には磯が出るので、私の穴場には直接影響はないようである。春立駅前の砂浜には多くの釣り人が竿を出している。魚が濃いからなのであろうか。午後であるので個人で来た方たちなのであろう。釣果を確かめたいところではあるが他の釣り場にも当たらなくてはならず、その余裕はない。彼方此方と巡っている内に時間が瞬く間に経過し、結局、途中の温泉に立ち寄って何か美味いものを食べさせてやろうとの思いを叶えることはできなかった。

本命、対抗、穴、無印

１週間が経った。集合場所に着くと現時点で年間トップの島氏が先に来ていた。冷やかすつもりで島氏の車に乗り込むと、彼は早々に缶ビールを飲んでいる。そして私にも無言で差し出した。何のつもりであろう。一緒に前祝いをやれと言うのだろうか。それともプレッシャーに潰されまいと今から景気をつけようとしているのだろうか。

年間優勝は島氏にほぼ決まってはいるものの、今回の大会で嵐氏が優勝した場合にのみ嵐氏に年間自力優勝の可能性を残している。嵐氏だからこそ、その可能性は高く不気味である。このような時には饒舌になるはずの阿部氏も気遣っているのか、プレッシャーがかからないようにと年間には関係のなくなった会員とのお喋りに興じている。

本日が今年最後の大会となるので、恒例の団体戦のくじ引きをした。各自がくじを引き、その番号を事務局長に告げて行く。チームのメンバーが少しずつ明らかになるにつれてどよめきやため息が聞こえてくる。そして各自の心の中では、本命や対抗、穴が勝手に決められていくのである。ひそひそと聞こえる話では私たちの組（広田　波辺　阿部　仲俣）は全くのノーマークであった。

本年度は過去に入釣したことのない場所で自分の穴場を探し出すという決意は、５回大会の古丹別川で反故にしてしまった。昨年度７回大会で優勝した春立に入釣し最後の足掻きをとの気持ちは拭えないが、もう一度初心に返り春立ではない所で下りよう。バスの中で先輩たちのアドバイスを受ける。嵐氏からの「三石川河口ではアカハラは取れる。１週間前の下見からでも、３５～４０の物が４本は取れるだろう。あと婿さんをどのように取るかだ。」との言葉に心が決定した。

本日は酒の量が多のか、バスの中がいつにも増して騒がしい。大会場所に近づくに連れて魚たちとのファイトへの決意が漲り、静まり返ってくるはずの仲間がいつまでも大声で話し込んでいる。最終戦だからであろうか、それとも・・・。

海底を這う

大会範囲のスタート地点である有勢内浜に着いた。下見を繰り返した所だが決意は変わらない。心がざわめくはずの春立４区も冷静に通過することが出来た。三石川に着いた。吉井氏も降りると言う。共に民家の間を抜け、河口に向かう階段を下りる。

三石港から連なる防潮堤が切れた所に釣り人が一人竿を出していた。いまだ釣り果なしとのことである。その先は誰もいない。

何処に釣り場を設定するかを考えているうちにも吉井氏が河口の方に向かってグングン歩みを進めて行く。私は防潮堤の切れ目から３０ｍ程の所に道具を置き、釣り場を設定した。まずこの砂場でアカハラを取り、明るくなったら河口方向の岩場に移動し、カジカやアブラコを狙うつもりである。

河口に向かったはずの吉井氏が戻って来る。そして私のすぐ左に三脚を設定した。二人でイカゴロを打つのでアカハラ釣りには申し分ない。しかし、いくら待てどもアカハラが来ない。

釣れないと愚痴を零しながらも丹念にイカゴロを打ち込んでいると吉井氏が打っている所がどうも砂州の様なので少し右にずれてくれないかと言う。こんなところに砂州なんかと思いながらも右に少しずれて打ち返す。それでもアタリがさっぱりないのでハゴトコ１匹で踏ん切りをつけた吉井氏がチャップ川の方に移動して行った。私にはそのハゴトコさえも来ない。しかしいつかはきてくれるだろうという思いで今度は２本を遠投に切り替えて同じ動作を繰り返す。

吉井氏が去って間もなくその遠投した竿の竿尻が大きく持ち上がってガクン、ガクンと揺れている。いつもは岩場での釣りのため、カジカのアタリは竿尻が落ちた弾みでガタガタと音を立てるので見逃すことはめったにないのだが、ここは砂浜である。その前にも前アタリがあったものと予想されるが、あわてて竿に跳び付く。ひとつ大きく合わせをくれてやるとガツンと根掛かりである。

いや、そうではない。リールを巻くと少しずつ寄って来るのだ。獲物は海底を這うよう

にズルッ、ズルッと移動してくる。今まで経験したことがない大物だ。獲物を根がかりさせまいと竿を胸にぴったりと付けて垂直にし、早く浮かせようとするのだが言うことを聞いてくれない。竿にもリールにも道糸にも自信があるがリールを回す手があまりの重さに耐え兼ねて震えてくる。真剣なやり取り（ただひたすらリールを巻き続けるだけなのだが）の間にも様々なことが脳裏を駆け巡る。

波打ち際の失態

暗褐色の海原から突然現れた斑模様の太い体、がっしりとした両顎、獅子を連想させる精悍な面構えが容赦なく私を威嚇してくる。果たして手を出すことが出来るのであろうか。飲み込まれた針を外そうとする私を怯(ひる)むことのない迫力で竦(すく)ませる。意を決して奴を両手で上から抑えると、砂面を這うような低い声が地底に吸い込まれていく。その姿から、健康な精子がタブタブしているであろう白子と生命エネルギーがぎっしり詰まったキモを連想し、逞しい野生を意識するに充分な存在感である。

奴の勇姿を何時迄も黒々とした墨にして残しておきたい。しかし、奴の鰓の張った獅子頭が収まるような和紙があるのだろうか？　様々に思い悩み、出口の無い迷路に迷い込んだ末の三石川だったが、これが奴にたどり着く正道だったのだ。春には丸坊主でどん底の憂き目を味わったが、起死回生の逆転満塁本塁打を放ち年間大物賞を我が手中にした。そんな想いが頭の中でぐるぐる回る、回る、回る・・・。

奴を取り込む準備のためにキャップライトを点けようとリールから手を離す。そのために道糸が決して弛まないように細心の注意を払いながら後退りをする。点いたライトを道糸に向ける。淡く照らし出された道糸の角度から奴が波打ち際に近づいたことを知る。河口方向からの潮流で奴も右に流され竿先の重量感が増す。いよいよ近づいた。波打ち際で奴をばらさないようにと道糸を張りながら慎重に前に出る。最後の大きな駆け上がりでゴツッと鈍い圧迫が腕に伝わる。あわてて竿を煽る。その瞬間、何も付いていない仕掛けが空中を舞い、私の横をビュッと音を立てながら掠めて背後に落ちた。波打ち際に駆け寄るが奴はいない。

よくよく見ると針が伸びている。その仕掛けは根がかりのためにハリスを切って失った針だけを市販のものに取り替えていたのだ。２本針仕掛けの下針で金１６号の丸セイゴである。波打ち際でも前に出ず、そのまま強引に上げていたら駆け上がりに引っ掛からずに済んだのではと思う。悔やんでも悔やみ切れない。しかし、結果は同じか。己の未熟さにホトホト愛想が尽きる。しばらく夢遊病者のようにそこに佇む。

逃げたカジカはもう一度来ると言う。しかしかなりの距離を引っ張って来ているので、奴も相当疲れていることだろう。私も疲れているが今逃がしたと思われるところに打ち込む。しかし何の音沙汰もない。

河口の移動

初冬の冷えきった海原に刻(とき)が漂白された時間だけが蜉蝣(かげろう)のように揺らめいている。ぼんやりとした暗闇を背に濃淡だけがはっきりとした日高の低い山並みが影のように立ち上がっていた。

その影から嵐氏が現れた。三石川の反対側の遠くで釣りをしていたが、さっぱりであり、バッカンにはアカハラ、ハゴトコ、カジカの小物しか入っていない。嵐氏が来たので私は三石川河口の岩場に移動しようかと状況を見るために進むと何とすぐに河口である。狭い川幅を通った水が勢いよく海に向かって右斜めに流れ込んでいる。ここで初めて吉井氏の「少しずれてくれないか」言葉の意味が理解出来た。

吉井氏が入った場所が河口のすぐ脇で、そこだと斜めに流れ込んでいる川の向こうに投げなければならない。川の向こうは砂州である。そのさらに向こうに投げていたのである。

河口の位置が地図とは全く異なっている。嵐氏に聞くと鮭が川に遡上する時期になると運河を開くと言うことである。それにしても狭いところで釣りをしていたものだ。川を渡って川の左に移動しようと思うのだが、流れが速いため断念せざるを得ない。さらに右に少しずれて、先程針を伸していった奴を取るために最後までここで頑張ることにする。

カジカが来る。３５㎝程の物だが先程の奴と比べるといとも簡単に上がってきた。寒さのために履いたゴム手袋の親指の先がリールの腕にぶつかるが支障はない。

鱈酒の味わい

それにしても手が冷たい。中に綿のついた大きなゴム手袋をしているのだが、エサつけ作業等のために脱ぐと骨まで寒さが忍び込む。砂浜に打ち上がった木切れを集めて火をつける。炎が勢いよく上がり体を温めてくれる。今日の天気予報は大変よく気温は零度に下がらないと予想していたが本当にそうだろうか。満天の星空を見ると天気は良いが、背後からの北風が寒さを募らせる。そのお蔭で仕掛けはよく飛んでくれるのだがやはりアタリはない。

リュックからワンカップを取り出し、火のそばの丸太の上に置く。炎に赤く染められて熱爛ができ、蓋を取ると仄(ほの)かに湯気が上がる。ゴクツと一呑みすると喉の奥を熱い火照りが染み込んでいく。蓋を開けたままさらに火の縁に置く。カップの表面に褐色の木タールが付き、酒にも木の温もりが染み込んでいく。これがまたフグの鱒酒を想わせる味わいで美味い。

酒のまわりと共に気力が失せてくる。打ち返しが機械的になりその回数も極端に減ってくる。チャップ川方向にはたくさんの人が入っているのが見えるのだが今更移動する気にならない。ただ同じことの繰り返しだが７時ごろハゴトコがパタパタと来て規定の２魚種５匹にはなった。大きなアタリは終(つい)ぞ来ない。

嵐氏が片付け始める。彼にしては随分早いようだ。それに合わせて私も片付ける。バスを待つ間、嵐氏が遠い昔を懐かしむようボソボソと語る。

「昔は三石川付近によく入ったもんだ。しかしその時は魚がいなく、早く切り上げ三石駅

の売店で酒を飲む事になった。まだ開いていない売店をむりに開けてもらって酒を飲む。その時も山岸、佐々木、嵐、今村で酒を飲んだが、終いには酒の売り物がなくなる程だった。大会と言えども楽しむ釣りで、今よりのんびりしていたものだ。」

昨年度永眠された角谷大先輩もお酒をこよなく愛した人であった。今回の大会は故人の１周忌にあたるため、彼の愛した入船海岸に花を手向ける。さらに御神酒を海に注ぎ、彼の冥福を祈り合掌し黙祷を捧げた。

本命穴馬かき分けて

審査結果

優　　勝	岡　英成	１１２３点（カジカ　415㎜+ハゴトコ278㎜+4300g）	東 静 内
準 優 勝	堀内正博	１０５５点（カジカ　399㎜+アカハラ351㎜+3050g）	盈　　進
３　　位	阿部重義	９８３点（アカハラ405㎜+カンカイ367㎜+2110g）	西 浦 里
４　　位	島　強二	９７７点（アブラコ414㎜+アカハラ343㎜+2200g）	三石港右
５　　位	秦野光徳	９６１点（カジカ　367㎜+ハゴトコ275㎜+3190g）	鳧　　舞
身長優勝	山岸　伸	４７．１㎝（カジカ）	西 浦 里

嵐氏が優勝できなかった事で島氏の年間優勝１３点（２，２，２，３，４）が決まった。７回合計でも２２点（＋４、５）であり、圧倒的な強さであった。

私は、１６位　７１６点（カジカ 366 ㎜＋ハゴトコ 220 ㎜＋1300g）で、年間入賞の可能性はなくなった。しかし、私たちのノーマークチームが団体戦に優勝した。その中では私が一番悪い成績で、チームの皆さんに感謝である。早速チームメートである広田氏とがっちりと握手を交わしていると、吉井氏が宣う。

「釣狂が足を引っ張ったな」

「優勝なのに『引っ張ったな』はないでしょう。それを言うなら『助けられたな』ですよ。私は賞を頂けるだけでありがたいです。吉井氏は何か賞をもらったんですか」と応酬する。

「あいたたた～～～っ。」

さらに追い打ちをかけて

「私は浮き沈みが大きい。しかも浮いているのはめったにない。その私が７００点を取ったのだから、ボンズの事を考えれば７００点も貢献したことになる。吉井氏こそ足を引っ張ったのではないか。いつも１０００点は必ず越える吉井氏の８００点は２００点も足を引っ張ったことになる。」

と屁理屈を捏ねる。

悪夢からの覚醒

審査後、門別町の泉食堂で昼飯をとる。ここのソバは黒くはないが太くて短い昔風ソバで評判が良く、いつも満席である。私たちが到着した時、丁度他の釣り会が去る時だった

ので、２階席に上がることができた。今は亡さ祖母が打ってくれたソバを思い出す。鴨ソバを頼んだが、鴨の肉から出るほんのりとした脂が美味みを増している。

私は釣り大会から帰るとすぐに後片付けをするのだが、今回は酷(ひど)い疲れで片付ける気にならない。ソファーに横たわるとすぐに眠りこけてしまった。女房に風呂が沸いたとせかされてどっぷりと湯に浸かる。そしてまたまたソファーに横たわる。女房に夕食だとせかされる。酒を飲んでまたまたソファーでうつろうつろ微睡む。布団に入ったのは１２時であった。年を取ったせいか体力が年々なくなっていくのを感じる。

人の心の裏側を抉るような残虐で不可解な事件が続く。高度な科学技術の発展、国際化、情報化の掛け声の裏で、貧困が蔓延り、民族紛争が絶えない。文明社会が築き上げた高層ビルに乗っ取られた旅客機が突っ込み炎上する。そしてそのビルが崩壊する様を全世界の人々が目の当たりにする。不況が長引き私の身の回りでもリストラが聞こえてくるようになった。気分が滅入ることが多い。早く悪夢から覚醒したい。大自然の大きな懐で海原と向き合っている時がつかの間の安らぎを与えてくれる。私の体内に内包された野生が目覚め、強くその生命存在を意識するのだ。微睡みとともに積もるストレスや不安が薄れていく。そして明日への活力が漲ってくるのである。

終わり

水交社の佐々木さんより電話をいただいた。昨年の記録に間違いと思われる箇所を発見したので確認したいということである。自分の記録はどうでもよいが仲間のものとなると・・・。釣遊会から出されている成績表を基に確認し、再度訂正の FAX を入れる。次号の「北海道のつり」に訂正文を掲載するということで、改めて掲載記事には絶対の責任を持つという出版社としての魂、使命感、誇りを感じた。

２００１年度の「北海道のつり」が薄くなってきた。長年愛読してきた私としては寂しい思いをしている。それは熱烈な愛読者にとっても同じであろう。集まる投稿が少ないのか、間違ってもそんなことはないと思うのだが水交社の経営状態の悪化（失礼）によるものだろうか。気になるところである。ただ、サボっているだけなら何とか編集者の奮闘を願いたいところである。私が訪ねた時には出版社の見慣れた風景であるが、雑然と積み上げられた書類の中で頑張っていた記者の姿が思い起こされる。読者数が減って来ているのなら、微力ながら読者獲得のために宣伝マンになる覚悟はある。ご一報を。

前野氏が「北海道のつり」の原稿を依頼され、鹿島釣狂のことに触れたからと話してくる。どんな釣行記なのか楽しみである。私も釣遊会仲間を実名で登場させているのでいやとは言えない。立場上、実名では困るので何とかペンネームでの記載を頼み込む。

過去にも岩見沢釣遊会の仲間の釣行記が『北海道のつり』に記載されてきた。隣に座った庄司氏も「原稿用紙４枚分を埋めるのはきつかった」

嵐氏の「年間優勝者が語る」も大変だったとのことである。